



沖縄キリスト教短期大学報

沖縄キリスト教短期大学

〒903-01 沖縄県西原町字翁長 777

電話 (09894) 6-1240

発行 学長 大城 実

編集 事務局 企画課

神の御業への参与

宗教主任 金城 重明



一九五七年四月九日、首里教会で囁々の声をあげた沖縄キリスト教短期大学は、開学三年目の一九八九年九月九日に、首里教会から西原新キャンパスへ移転した。丁度一年前の出来事である。これは私共の短大にとって能力を越える世紀の大事業であり、三〇余年にしてこの快挙を成し遂げた事は、生ける神の不思議な御業としか表現出来ない。仲間の一教授が、「これは奇跡ですね」と言われた言葉が、私の心に深く残っている。

更に神は、人間が御自身の御旨を知り、より自覚的に神の歴史の働き・救いの御業に参与する事をよみされる。神は全能を以て御自身の計画を実現なさる時、圧倒的に人間を支配しなから、人間の自由を確保なさる。決して人間をロボットにしない。人間に神の御業への参与を体験させ、自発的に神の栄光を讃えさせるのである。それは最も優れた人間の自由権の行使でもある。

西原キャンパス建設の大事業は、当初人間の地平からは可能性が見えて来なかったのである。にも拘わらず、生ける神は、理事長・学長始め、理事者、評議員、教職員、学生・父母、教会関係諸機関・団体、地主及び数知れない有志協力者を用いられ、新たな可能性の地平を開かれ、大きな夢を結実せしめられたのである。それは、沖縄に存立する唯一のキリスト教精神に基づき、高等教育機関建設に、神が多くの人々を参与せしめられた証であると感謝せざるを得ない。

先日来日したイギリスの一天才理論物理学者の、「この宇宙は神が創造したのではない」との発言を偶々テレビを通して聞いた。その真意の程は分からないが、創世紀に記された素朴な古代「創造物語」を、現代科学とは相入れないものと、否定的に語られたように思う。しかし、神による宇宙・世界・人間の創造信仰は、その根拠と意味目的を述べているのであって、科学の領域に属する発生や進化の過程等を語ってはいない。信仰者が、科学的真理については科学者に聞くように、科学者は、宗教的真理については聖書に聞くべきである。科学的物差しで宗教的真理を測ろうとする時、非科学的になる。神との関わりで、物事を洞察し、行動し、生きるのが信仰なのである。従って、世俗的・日常的事柄は、信仰の対象となる。

人知を遙かに越えた神は、極めて日常的方法で、世界内の様々な人間の・物的要素を用いて、私共 新しい草袋としてのキャンパスを完成させて下さった。草袋を造るのに、これ程までに神の大きな御導きがあったとすれば、草袋を満たす新しい葡萄酒即ち「キリストに在る教育」の業に、神の限りない愛と御力が注がれない筈はない。キリストに在る教育の革新が求められるのである。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださるのは神です。」(コリント第一、三・六)、このパウロの言葉のように、キリスト教教育の真の主体はキリストご自身なのである。私共は、キリストの手足・器として自らを提供しているに過ぎない。

教育とは、人間を総合的に育てる業であるが故に、教育活動がキリスト教的と思われなくても、究極的には「キリストに在る」人間教育に参与せしめられているのである。この世界に存在するものは総て神のものであり、キリストの支配下にある。その事を信じ、自覚的に受け止めるかどうかは、キリスト教育の成否は懸かっているのである。

(きんじょう しげあき)

校歌決定

校歌選定委員会(下地玄毅委員長)では昨年十月に「校歌詞」本年四月には「校歌曲」の公募を行い選定作業を進めてきた。応募点数は全国各地から「歌詞」四十六点。「曲」は県内公募で九点の応募をいただいた。

「建学の精神と伝統を継承し、二十一世紀を担う有為な人材となることを期待して、本学にふさわしい校歌を」とする校歌選定の趣旨に基づいて選定作業が行われた。

応募作品は力作揃いで選考は困難を極めたがその中からそれぞれ次の二名の方に決定した。

◎歌詞
徳山 潔氏
宜野湾市在 球陽高校教諭

◎曲
会沢 芽美氏
浦添市在 音楽家

沖縄キリスト教短期大学校歌



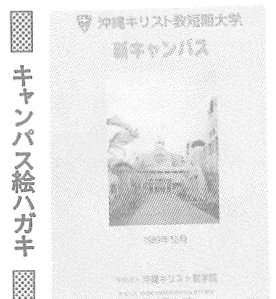
一 緑あふる 西原に
かがやく朝の光あり
丘の上なる 聖き地に
神の御教え戴きて
清きところに 培わん

二 光みなぎる 学院の
若きわれらに 希望あり
四方を万里に眺めつつ
熱きおもいを胸に秘め
自由を求め 羽ばたかん

三 見よ東の 暁の空
愛と恩恵の みことばを
祈りにこめて われらまた
真理の道を究めなん
母なる学院 いざ永遠に

移転報告書発行

事務局企画課ではこのほど校舎移転の概要・施設の紹介などを網羅した報告書「沖縄キリスト教短期大学新キャンパス」を発行。学校、団体、教会等関係機関へ配布した。



学生、卒業生から要望の高い「キャンパス絵ハガキ」を求めています。八月二十三日から二十六日までの四日間にわたり開催された「世界のウチナンチュ大会」海外十九カ国から約二千人の県出身者が集い、多くの感動と国際交流を生んだ。▼百年の歴史をもつ本県海外雄飛者たちはそれぞれの国の文化・社会に溶け込むことにより、逆にウチナンチュとしての誇りとパワーをも次世代に受け継いできたようである。

▼今大会には、小・中・高校の若い世代も多く参加している。二十五日には、「ワールド・ウチナンチュ・ジュニア・サミット」が開かれ、ウチナンチュ・ジュニアと県内青少年の交流が行われた。▼そのジュニア・サミットでの公演を挟んで大会前夜祭から五日間、ボランティアとして働いた学生たちがいる。シグマ・ソサエティー(豊見山の子代表のメンバーである。▼同サークルは日頃から勉学の合間をぬって幼稚園、保育所、その他児童施設や各種催し物会場での公演活動を活発に行っており関係者から喜ばれているが、このような国際交流での機会は少ない。それだけにメンバーの働きにも一段と熱が入ったようである。

「ハロー・マイフレンド」等得意のボードビルで会場を沸かせた。▼豊見山代表は、「気持ちよく、ノリがよく、雰囲気を作り上げていくのがうまい。中でもブラジルの子供たちはエネルギッシュ」と話していた。ことばの壁を吹き飛ばす程の楽しい経験であったがそれにしても外国語の理解があればと語学の必要性を認識したとか。

キャンパス絵ハガキをただいま製作中。数枚一組で移転一周年記念行事開催当日頒布予定。

春夏秋冬

キャンパス移転を ふりかえる

事務局長 山原 恵 治

大学の移転自体が一つの都市問題であるという。学生が、教職員が、そして出入りの業者が都市形成に、あるいは文化的機能を地域に、影響を及ぼすからである。しかし、あえて問う。

大学は、地域のシンボルとなりうるか。大学と地域は、共存共栄の関係にあるか。

大学の機能は、周辺地域に寄与しているか、社会に奉仕しているか、貢献しているか。

将来、大学は、都市形成に望ましい存在か。

一九八三(昭和五八)年五月移転用地買収を開始した。「オマエハ、ニドトコニコ、ルナ」。

キリスト教講演会へ要旨

「即位礼と大嘗祭について考える」

日本伝道所牧師 戸村 政博氏

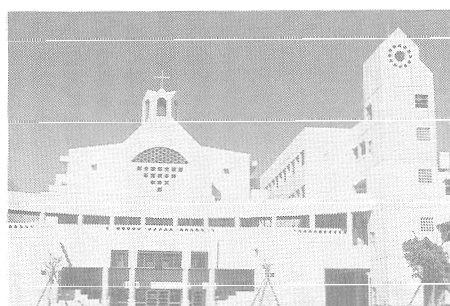
今日は半年先に予定されている最新現代史、即位礼と大嘗祭について一緒に考えてみたいと思います。

天皇代替わりは六〇年か七〇年に一度の出来事です。前の大嘗祭は一九二八年でその年生まれの人々が六十三歳です。天皇死去、同日の簡単な儀式による新天皇の即位と改元、約二か月後の大嘗、一周年祭を経て即位の年に入ります。今年が春から、新しい稲を栽培するための斎田決定など十一月の屋間行われる即位礼と夜の儀式である大嘗祭のための準備を始めてい

校舎建設用地に係る許可等の法律の網の目がすまなく張りめぐらされている。それを一つ一つほぐし、クリアしていくかなければならないからである。気が遠くなる仕事である。いや、紙面の都合上、一件だけ紹介する。

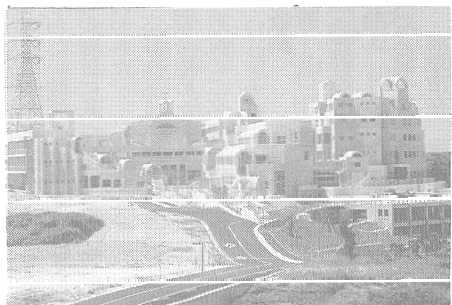
建設省所管公共用財産(里道)付け替えおよび加工承認許可手続である。

つまり、個人の所有地以外の山道、あぜ道等の里道は、建設省の所管財産(国の所有財産)である。したがって、里道を付け替えたり整備拡張するには、許可が必要であるという法律である。



この里道が、学校敷地のなかを通っている。土地を有効に利用するために、敷地の外にださなければならぬ。ただ、敷地の外へ付け替えるだけではだめである。幅一メートルから二メートルの細い小径(里道)を四・五メートルから六メートルの道路に拡張しアスファルトで舗装して公共用道路として整備しなければならぬ。費用はすべて大学の負担である。その上、拡張整備した道路は、無償で国に返還することになっている。これが法律である。理屈など通用しない。現在、大学が使用している道路がそれである。

アプローチ道路からまっす



ぐ校内にはいつてくると真正面に「字架」が見える。校舎建設の基本イメージである。

私学には、独自の「建学の精神」、伝統、校風等の特殊性がある。建学の精神は、学校法人設立の趣旨であり、教育目標である。本学の場合、建学の精神を象徴するのがチャペルである。チャペルを中心に南北に校舎を配置し、回廊でそれぞれの校舎を一つに結んでいるのが特徴である。



アプローチ回廊は、着飾った女達が好き好きの草花を手にアーチを形づくり、そこを通る人を笑顔で迎えてくれる。そんなイメージをあたえてくれる。

大学は、居住空間(レジデンス・ゾーン)と教育研究空間(アカデミック・ゾーン)からなる。学ぶ者も、そこで働く者も、日の大半をキャンパス内で過ごす。だから、快適さが要求される。教室は明るく、西原富士方向から吹いてくる南風の風をとおすように、オーブンスペースにした。(しかし、夏はやはり暑い)

便所は、快適さがもっとも要求される所である。便所は、暗く、臭く、狭く、怖いところというイメージがある。新キャンパスはそれを一掃す。(やまはら けいじ)

台風の中

「国家と宗教」を考える

毎年恒例のサマー聖書キャンプは台風接近のため伊江島からぎのわんせセミナーハウスに場所を変更して八月二八日・二九日に行われた。参加者は本短大学生七名、福岡女学院短大学生四名、教職員他七名の計十八名。今回のキャンプは「国家と宗教」をテーマとし、聖書に聞きつつ日本の国を過去・現在の在り方を共に学び考えることを目的として行われた。一日目は「国家と宗教」と題して金城重明宗教授の発題が行われ、次のような内容であった。

現在の日本は学校教育(日の丸、君が代)を通して国家主義思想を児童生徒に押しつけようとしている。また、大嘗祭という天皇を神とする国家的・宗教的行為が行なわれようとしている。「信教の自由」「政教分離」で重要な点は、政治権力又は国家を、国民の内面の世界に踏み込ませてはならない、ということである。また、真に神を神とし、人間を人間とするところから、自由も平等も生まれてこない。

旧約聖書の王と預言者の関係のように、国家がどのように誤った道に進もうとする時、主権をもつ市民、預言者の使命を与えられたクリスチャンはそれに歯止めをかけ、正しい方向づけを促す義務があり、手放して政治家に委ねることは責任放棄である。

「地域マーケティング」

沖縄県を中心に

新設校編纂(同文館)

本書は、一九七二年の本学復帰を境にして沖縄県の産業構造や流通システムがどのように変化してきたかに言及しながら沖

研究助成決まる

本学は2教授

宇流麻学術助成基金

宇流麻(うるま)学術研究助成基金の一九九〇年度助成対象二十八件が七月三日決定し本学英語科の伊志嶺博士とライル・アリソンの二教授も選ばれた。

二十八件の内訳は、研究助成十九件、交流助成七件、その他の事業二件で、両教授とも研究助成の人文社会科学部門。研究チームは伊志嶺教授が「戦後沖縄における私大成立発展史」、アリソン教授が「沖縄の信徒による西洋の宗教習慣と沖縄門中と家族儀式への影響の度合」。

発題の後、意見交換、質疑応答が行なわれた。翌日は、ビデオ「遅すぎた聖断」の上映。福岡女学院短大の学校紹介等が行なわれ、短いながらも現在の日本の状況を聖書に照らして考える有意義な時、また交わりの時となった。



チャペルに

パイプオルガンの

響きを

「沖縄キリスト教短期大学のチャペルにパイプ・オルガンを贈る運動」は実行委員会(委員長・伊波盛次郎小椋バプテスト教会牧師)により、募金活動を展開中ですが、このたび全国のキリスト教会にむけて献金運動を展開することとなりました。沖縄で唯一のパイプ・オルガンの設置のため、ご協力をよろしくお願いいたします。

購入機種 年内に決定予定
購入経費 約二千五百万円
(予定)

募金運動期間
一九八九年九月一日〜
一九九一年八月三十一日
目標額 二千万円
現在額 百十八万円
(九月二〇日現在)

詳しくは、事務局企画課まで
〇九八四(六)一二四〇



去る四月より地域の生涯学習センターをめぐり公開講座を開き「カウンセリング入門講座」と「初級イタリア語講座」で好評なスタートを切った。本学の公開講座の歴史は古く過去において、「キリスト教講座」「イタリア語講座」「保育講座」などがあり好評を博した。今回の講座開設は過去の経験を生かし今日の社会的要請に応えるようあらゆる角度から検討した結果の再出発である。

公開講座

多彩なプログラムで好評

公開講座の目的は、大学が有する施設設備や知的資産など総合的な教育機能を一般に開放し、地域の生活、文化、職業などの向上に役立てることにより地域社会に貢献することにある。

目的に沿った講座プログラムを設定するため公開講座委員会(委員長・漢那憲治)では検討に余念がない。提供する内容は、趣味、教養、実益、専門と多彩である。

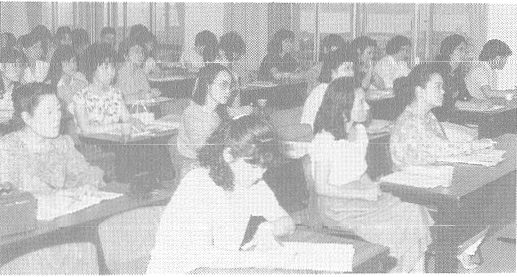
同委員会ではさらに受講者の「声」を大事にするためアンケートを実施。講座に関する意見、要望などを聞いて講座運営の参考にしている。

地元をはじめ那覇市、浦添市、宜野湾市など西原町近隣からの参加が多いが夏期講座の「図書館員のための英語」では高速道路を利用して遠く北部の大宜味村からの参加もありその熱意に担当者はじめ受講者一同が驚嘆した。

また、「保育所保育指針と保育の展開」では受講した十七人の保育士、園長、所長さん等が講座修了後も勉強を続けようという研究会を発足させたという嬉しいニュースも入っている。

講座参加を契機に活動や相互交流の機会を広げても公開講座のもつ魅力かも知れない。

十月開始の「初級カウンセリング講座」は大半が前回からの



▲ カウンセリング入門講座風景

- 〔後期定例講座〕
- ◎水墨画講座(十月〜十二月 金曜 計11回) 担当 儀間朝健 本短大助教授
 - ◎カウンセリング初級コース(十月〜十二月 木 計10回) 担当は前期入門講座と同じ
- 〔夏期公開講座〕
- ◎初心者のためのワープロ入門講座(連日 計8回) 担当 渡久地初美 本短大非常勤講師
 - ◎保育所保育指針と保育の展開(土曜 計4回) 担当 喜友名静子 本短大教授
 - ◎図書館員のための英語(火・木曜 計8回) 担当 漢那憲治 本短大教授

受講者で占められているが新開設の「水墨画講座」では多くの新たな出会いを期待したい。

これまでの開設講座は下記の通り。

〔前期定例講座〕

- ◎カウンセリング入門講座(四月〜七月 木曜 計12回) 担当、渡久地政順 本短大教授、座間味宗治 オリブ山病院相談部長
- ◎初級イタリア語講座(四月〜七月 火曜 計12回) 担当 島袋忠雄 本短大助教授

準備！

古堅三千代さん(英一)

全国学生英語弁論大会西部地区大会

六月九日、北九州市で開催された第四十四回全国学生英語弁論大会西部地区大会(主催・毎日新聞社、毎日デリー・ニューズ)に出場した英語科一年の古堅三千代さんが熱弁を奮い見事準優勝に輝いた。演題は「More Opportunities To Think」も「考える時を」。



▲ 学長、アリソン教授と

高校二年の時、米国コロラド州の高校に留学した際の経験を踏まえて、日米の学校(大学)教育の相違点に触れ、「授業へは発表やディスカッションを通して自分の意見を述べ、もっと積極的な姿勢で参加できるように」と主張し、次ぎの3点を強調

就職戦線

いよいよ中盤

十月に入り就職戦線もいよいよ中盤戦である。八月一日の求人票掲載をもって開始した今年の「就職」も昨年のいざなぎ景気を引き継ぎ、好景気に裏付けされた好調な滑り出しとなった。県内、県外とも前年を大幅に上回る求人数があるところから就職活動を展開中の二年生にとって見通しの明るい年と言えそう。

保育科関係の就職は従来より若干早めの十月から年明けにかけてピークを向かえる予想されるが、企業等の採用活動は早期から活発な動きをみせている。八月から九月にかけて採用試験が盛んに行われており十月一日

調した。①米国の学校は外国人生徒(学生)も多く多様な考え、意見があることを理解できる。留学生を多く受け入れることによってものの見方を広げることが出来る。②どんな小さなことでも自分の意見を発表できるようにする。③興味のもてる授業科目を増やし、学生の選択の枠を広げてほしい。

今大会には、大学や短大の代表十二名が出場。古堅さんは惜しくも全国大会への出場権は逃したものの、開催一週間前に出場の意志を固め短期間の猛練習で、しかも多くの4大生を相手に健闘した。指導は英語科のアリソン教授。練習では、「特に発音と、英語がスムーズに流れるようにアクセントに注意し感情の表しかたに気をつけた」とのこと。

空手道 成年女子型

名渡山秀子(英一)

県代表で第45回とびうめ国体へ

十月に福岡で開催される第45回秋期国民体育大会に空手道成年女子型成年女子型として参加する名渡山秀子さんと伊礼



▲ 左から、伊礼、漢那順間、名渡山

年女子型の部沖縄県代表として、英語科一年の名渡山秀子さんの出場が決まった。

これは、六月十日浦添市民体育館で行なわれた第九回県空手道選手権大会第一回選考会での優勝を皮切りに、七月宮崎大会での二次選考、八月、県空手道選手権大会全員の審査による最終審査の第三次選考を経て決定した。十月二十二日から二十四日の試合には得意技の白虎(バイク)など三つの型で臨む。此迄の実績があるので活躍に期待したい。

全九州学生空手道選手権大会五月二十七日、熊本県に於て開催された第三十一回全九州学生空手道選手権大会に本学から出場した名渡山秀子さんと伊礼

1990年度 33期 内定状況												
卒業 予定者	就職 希望者	求 人 件 数				内 定 者 数				内 定 率		
		県内	県外	計	前年同月	県内	県外	計	前年同月	今年度	前年同月	
英語科 保育科	182	159	92	100	192	123	29	8	37	27	23%	18%
	85	76	1	4	5	5	8	1	9	1	12%	1%
計	267	235	93	104	197	128	37	9	46	28	20%	11%

'90 10/1 現在統計

'90 10/1 現在統計



▲ 正装パーティーで

「母国語は人格を形成し、外国語は世界を広げる手段である。」と誰かが言っていました。これは、まさに私が十月間の留学を終えた感想をひと言で表した言葉だと思えます。

昨年九月から今年の六月まで短大の留学奨学生として米国ミシガン州のホーランドというオランダ人が開拓した小さな町にありました。町のいたる所にチューリップが咲き乱れ、大学構内では野性のリスが走り回り、留学当初は、まるで映画の一シーンの中を自分が歩いているよう不思議な気分でした。

勉強の方は、教室と寮と図書館を行ったり来たりで日が暮れ自分の英語力の無さをつくづく感じ、自己嫌悪の毎日でした。

しかし、私の二倍も三倍も勉強する米国の学生に刺激を受け、また嫌な顔ひとつせず私の何度も英語を説明したり、私の未熟な英語を理解しようとじっと耳を傾けてくれた米国人の優しさをかたむけてくれた米国人の優しさに勇気づけられ毎日頑張っていました。

勿論、キャンパスライフは勉強だけではありません。週末は、構内で催される学生のピアノコンサートや演劇を観に行ったり、映画館やジャズハウスへ足を運んだり、日本ではなかなか経験できないような正装パーティーへ行ったり……。

私にとって留学とは、「いろいろな事を考える期間」でした。異文化体験を通して、今までとは違った物の見方や考え方ができ日本を客観的な立場からみたり、親元を離れて親の有り難さを感じたりと、外の世界を知ること新たに自国や自分を見直す期間だったと思います。

そんな中で一人でも多くの人が異文化を自分の肌で感じることできたら素晴らしいと思います。

台湾・国際青年の集に参加

英語科二年 池原さん

台湾で開催された国際青年音楽(青年の集)に今年も本学学生が沖縄県国際交流財団の推薦を受けて参加した。参加したのは、英語科二年の池原富裕子さん。

「青年の集」は、外国の青年たちを招き、交流を通して広く台湾の歴史、文化、習俗、生活、政治経済、社会を知ってもらおうというのが主旨で毎年開催されている。今年は八月十三日から二十四日までの十二日間の日程で、四十数カ国の青年(二十才から四十才)が集った。

滞在は、一行は、台北、花蓮、高雄、墾丁などの各市を訪れ政府機関、公共施設、新聞社等を見学した。

参加者の使用言語は英語及び中国語。休学して中国留学の経験がある池原さんは中国語も達者。各国からの参加者とは英語で、十八名の台湾側セクレタリーとの会話は中国語で、持てる語学力をフル回転させて有意義な研修旅行を楽しんだようである。インタビュの翌日、池原さん

をかたむけてくれた米国人の優しさに勇気づけられ毎日頑張っていました。

勿論、キャンパスライフは勉強だけではありません。週末は、構内で催される学生のピアノコンサートや演劇を観に行ったり、映画館やジャズハウスへ足を運んだり、日本ではなかなか経験できないような正装パーティーへ行ったり……。

私にとって留学とは、「いろいろな事を考える期間」でした。異文化体験を通して、今までとは違った物の見方や考え方ができ日本を客観的な立場からみたり、親元を離れて親の有り難さを感じたりと、外の世界を知ること新たに自国や自分を見直す期間だったと思います。

そんな中で一人でも多くの人が異文化を自分の肌で感じることできたら素晴らしいと思います。

高3の時、初めて見た残波大獅子太鼓のコンサートに、言葉で言い尽くせない感動を覚え短大に入学すると同時に太鼓を始めた。毎日三時間の練習は学生である私にはかなり厳しくコンサートや県外公演がある時など授業を休んだこともありましたが、しかし、太鼓を通して私に得たものは期待以上に大きく素晴らしいものでした。

身体の不自由な方々のための施設で公演をしたり、多くのお祭りや学校公演にも行きました。二時間近い公演を行った後は立つこともできない程体力を消耗します。けれど観客の満足した表情を見ると、「最後まで力を抜かず叩いてよかった」と思います。

「素晴らしい太鼓を有難う」「生きる勇気が湧いてくるよ」と声をかけられた時、涙が出るほどうれしくなります。何故なら、私自身、太鼓に生きる力と勇気をもたらした一人なのですから。



▲ 中央が、喜納さん



▲ 前列二人目が池原さん

企画課